

リビングウイルについて

終活という言葉が最近耳にします。加藤茶さんがコマーシャルでエンディングノートを描く姿を見たことがありますね。終活は「人生の終わりのための活動」の略で具体的には相続のこと、保険のこと、葬儀のこと、お墓のことなどの準備や計画を元気なうちに行うことです。そうすることで残された時間を穏やかな気持ちで過ごすことができるといわれます。一方、人生の最終段階の時に受ける医療について、元気なうちに自分の希望をしめしておくことをリビングウイルといいます。どんな病気になるかもわからないし、突然かもしれないし、そんなこと決められないと思う方がほとんどでしょう。でも医療現場では認知症などで患者さんの意思がわからず、どのような最期を迎えさせてあげるのがその人らしいのか判断に困ることが往々にしてあります。厚生労働省ではこの問題に対して、平成19年からガイドラインを作成し、なるべく身近な人(家族や信頼できる友人)に自分の意向を話しておくことや、介護従事者や医師に伝えておくことを推奨しています。

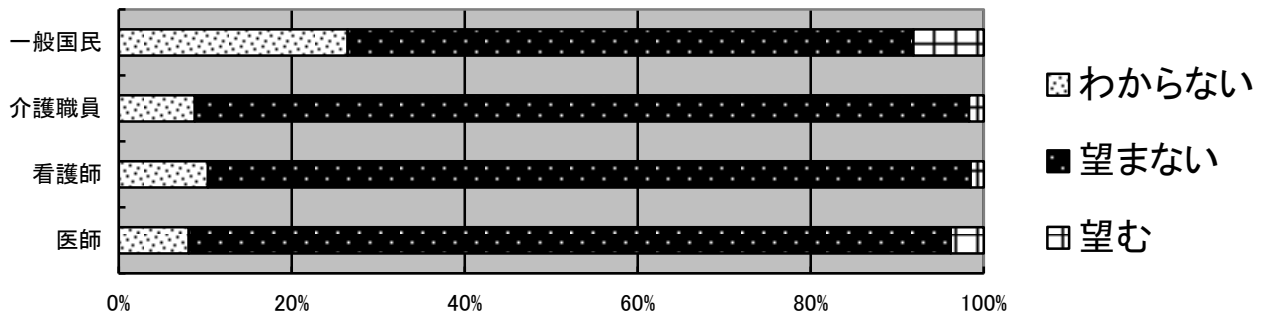
では具体的にどんなことを話し合えばいいのでしょうか



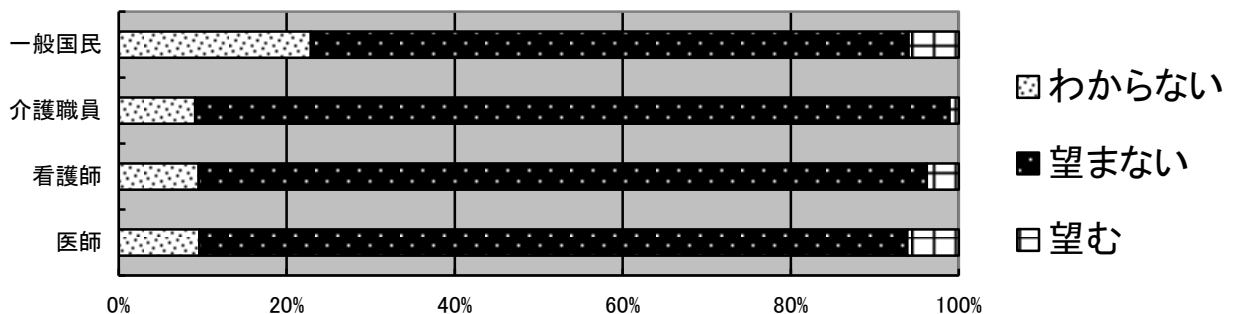
厚生労働省が行った意識調査

平成30年に国民2万3500人を対象とした「人生の最終段階における医療に関する意識調査」があります。

1)呼吸ができにくくなった場合、気管に管を入れて人工呼吸につなげることを望みますか



2)口から十分な栄養が取れなくなった場合、手術で胃に穴をあけて直接管を取り付け、流動食を入れることを望みますか(胃ろう)



このように、80%以上の方が望まない治療なのに、意思の確認ができず行われているのが現状です。特に胃ろうについては、1年後に口から食事ができるようになる見込みがある場合には推奨されますが、そうでない場合は本人の意思をよく確認してから行うように指導されています。あまり考えたくないことではありますが、自分が最後の時を迎えるときに、どんな医療を受けたいのか誰かに伝えておくことが大切です。その意思がケアに携わる方々に伝わり、尊重され、あなたが自分らしく誇りをもって最後を生きることにつながります。